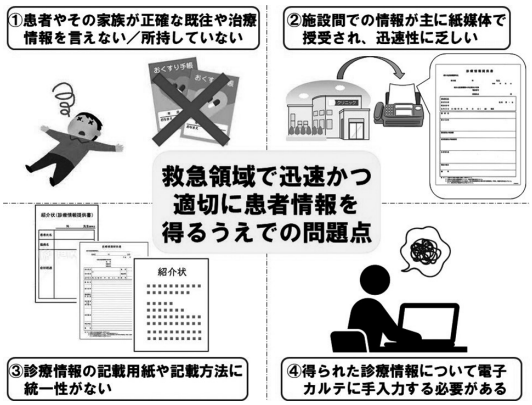
救急搬送患者における医療情報の実態に関する調査研究

真田 泰明　●大阪大学 医学部附属病院 薬剤部



救急医療で直面する患者情報に関わる様々な問題点

1.背景と目的

突然の疾病発症や受傷、社会の高齢化に伴う核家族化などの影響により、救急搬送患者の基礎疾患や服薬情報が不明確なまま、初期診療を開始しなければならないケースが多々ある。特に抗血小板薬・抗凝固薬、抗不整脈薬、抗精神病薬、抗てんかん薬、糖尿病薬などのいわゆるハイリスク薬の服薬情報の欠如は急性期疾患の診療に対して大きな影響を与え、中には患者転帰に重大な悪影響を与える可能性がある。しかし、急性期医療において服薬情報の欠如が予後にどのように影響しているかについてはない。

本研究の目的は、当院のこれまでの救急搬送症例における搬送時の服薬情報の有無、ハイリスク薬の服薬状況について記述することである。

2.取り組みの方法

デザイン：後ろ向き観察研究（記述疫学研究）

調査項目：2010年4月から2022年12月末までに大阪大学医学部附属病院高度救命救急センターに救急搬送された全患者（約1万人）を対象とする。対象患者のカルテID、性別、年齢、搬送データ（日時、理由、搬送元、薬剤情報の有無）、救急隊接触時の意識レベル、搬送所要時間、搬送段階で把握できている既往歴、入院後に判明した既往歴、来院時バイタルサイン、初期診療における手術／インターベンショナルラジオロジー／血液透析導入／トラネキサム酸投与の有無、来院2日目までの各種輸血量、身長・体重、初回の血液検査データ、当院の受診歴、ハイリスク薬剤（抗血小板薬・抗凝固薬、抗不整脈薬、経口糖尿病薬）の処方の有無及びカルテ記事への記載の有無、既往歴、入院中の種類別総輸血使用量、退院日、入院日数、お薬手帳または薬剤情報提供書のスキャンの有無、確定診断名、主病名、転帰について電子カルテより抽出する。

データの解析：患者特性データは、適宜、平均値（標準偏差）または中央値［四分位範囲（IQR）］として記述する。患者基本特性を比較する場合、カテゴリカルデータにはPearsonのカイ二乗検定、連続データの比較にはKruskal-Wallis検定を用いる。有意水準は$p<0.05$、信頼区間は95%とする。

3.期待される成果

急性期医療における患者情報の有無について記述する。また、その結果に基づき、地域の保険薬局と連携してお薬手帳の常時携行を促すポスターやリーフレットの発行・配布などの啓蒙活動を通じ、地域における救急搬送時の患者転帰が改善されることが期待される。